

クロスカリキュラムを活用した国際理解教育の取り組み

前プラハ日本人学校 教諭

愛媛県今治市立大西中学校 教諭 越 智 美登利

キーワード：クロスカリキュラム, 書道, 浮世絵, ユニセフ

1. はじめに

チェコ共和国は、西はドイツ、北はポーランド、東はスロバキア、南はオーストリアに囲まれた内陸国であり、その言語・文化・歴史等に関しては周辺諸国との関係を抜きにしては語れない。気候は温帯の西岸海洋性気候であり、首都プラハの雨温図は札幌の雨温図の降水量を半分にしたものに近い。台風や梅雨はなく、地震もない。しかし、今年5月末から中欧では豪雨が続き洪水が発生し、首都プラハでもヴルタヴァ川の水位が上昇し、観光名所であるカレル橋が閉鎖されたという報道があった。チェコの面積は北海道よりやや狭く、人口は神奈川県より多く、東京都より少ないくらいである。チェコに住む日本人は在留届を出している人に限ると1500人程である。

プラハ日本人学校は、ヴァーツラフ・ハヴェル空港から南東に5km足らず、中心部からは西に10km足らずのプラハ17区ジェピイ（Řepy）地区の住宅地の中にある。教室の窓からは航空機の姿を見ることができ、しかもその会社名がわかる程の近さである。全校児童生徒数は100名前後で推移し、教職員は派遣教員12名を含む20名程であり、互いに交流を図れる規模である。プラハ17区役所の広報誌Řepkaにもとりあげられ、地域の外国人学校として認識されている。その最たるものが、「欧州隣人の日」（European Neighbours' Day）であると言える。これは毎年5月下旬、PTA学級委員の方々が中心となって行っていた。近隣の方々に日本文化に触れ親しんでもらうことで、地域の中の学校を印象付けてきた。例年、学校のグラウンドを利用し、児童生徒の有志も参加して、近隣の方々に書道・着付け・折り紙・正月遊びの体験や空手や民謡踊りの披露を行っていた。地域の人々に開かれたこの活動が評価され、平成24年度からはプラハ17区役所によって、会場を移して開催されている。

元来この行事は、パリ区助役がアパートで死後一ヶ月後に発見された老女の話に衝撃を受け、住民に交流があれば悲劇は避けられたと考え、2000年に始まった。以来、36ヵ国以上1500都市で行われている。集まった人々と話し、人の縁を広げる運動で、共により良く生きることで垣根をなくすことを目的としている。

また、近隣には3校の基礎学校（日本の義務教育に相当。小学校5年間と中学校4年間）、複数の幼稚園、私立学校であるギムナジウムなどがあり、日本人学校の児童生徒と交流を行っている。

本稿では、近隣校との交流及び現地の施設研修のうち、複数の教科の特性を生かして計画・準備・実践したものについて紹介したい。クロスカリキュラムの捉え方はいくつかあるが、ここでは、ねらいを実現するために複数の教科のスキルを活用すると考える。この手段を用いることで、複数の教職員で協力し合うことができ、授業時間を確保する上でも有効であった。

2. チェコ人の友達に英語で書道を教えよう ～国語科と英会話のクロスカリキュラム～

小学部6年生を対象に、「チェコの児童と英語を用いてコミュニケーションをはかる」、「書道という東アジアの文化をチェコの児童に伝え共に親しむ」ことを目標に学習活動を計画した。彼らは5年生のときにも、基礎学校ヴェリヒ校の児童と交流しており、互いの学校を行き来し、英語を用いて校舎を案内したりゲームやダンスを楽しんだり、また、歌や楽器の演奏を披露したりして高い評価を得て、交流を通して充実感を味わうことができた。6年生のときには、交流コーディネーターの方の助言もあり、日本文化を紹介する活動を考えた。幸い、週1回の書道と週2回の英会話を担当しており、英語を用いて書道で交流しようと考え、ティーム・ティーチングで一緒に英会話を担当していたチェコ人の講師の協力を得て準備を行った。

(1) 事前指導

まず、書道の時間に筆の持ち方、姿勢、運筆の仕方などを復習し、それらを身体を使って表現できるか確認し合った。次に、チェコ人の友達に教えたい好きな漢字を選び、練習した。選んだ漢字は子・卵・良・友・力・笑・真・竜・木で、自分の目標だったり、好きな食べ物だったり、英語で説明しやすい文字だったりさまざまであったが、一人一人のこだわりが感じられた。しかし、書道の時間に練習した文字から応用しにくい文字を選択した児童もあり、文字のバランスをとるのに苦戦していた。自分自身が苦勞している文字を教えることができるのだろうか、という不安を感じる者もいた。さらに、これらの好きな文字を書いた葉をお土産用に作製した。

英会話の時間には、書道のときの姿勢や筆の持ち方について英語で説明する練習をした。また、児童が自分の選んだ文字の意味やその文字を選んだ理由について説明できるように英文を考え、それを発音する練習を行った。講師の方により適切な表現や発音をチェックしていただいた。他に自己紹介の練習などもして、ヴェリヒ校の児童達と楽しく交流できるように、いろいろな表現を確認、練習した。

さらに、交流のための指導計画を先方の教員に送り、児童のグループ分けや墨汁を使用するため汚れてもよい格好で来てほしいこと等をお願いした。

(2) 交流

当日は30人余りのヴェリヒ校の児童を9つのグループに分け、一斉に書道や漢字についての説明を行ってから、グループ活動に入った。交流も3度目であり、お互い顔見知りの者も多い。一人の日本人児童が3～4人のチェコ人児童と活動した。英語を使って東アジア文化・日本文化を紹介することが目的であったが、互いに言いたいことがうまく伝わらないグループもあり、ジェスチャーと英語で意思表示をしている者もいた。しかし、どのグループも自分の書いた文字を満足そうに鑑賞していた。何枚も練習してより良い作品を書くよりも、2～3枚書いて「だんだん上手になったね」とほめている姿が見られた。また、日本人学校の児童がヴェリヒ校の児童に名前を尋ね、それに漢字を当てて作品に名前を書き込むなど自発的な活動をしていた。児童には帰り際に、装丁した作品と手作りの葉を手渡し、たいへん喜んでもらうことができた。先方の教員の方にも書道は「美しい」と好評であった。

3. 日本の美術作品に触れよう ～社会科、英語科、総合のクロスカリキュラム～

中学部1、2年生9名を対象に、「日本の美術作品に触れる」ことを目標に、社会科と英語科と総合的な学習の時間を活用して学習活動を計画した。江戸時代末期から明治時代にかけて日本から多くの美術品、とりわけ浮世絵が海外に流出した。ボストン美術館やプーシキン美術館のコレクションが有名であるが、ヨーロッパの美術館にも多数のコレクションが存在する。プラハ近くでは、ベルリン国立博物館アジア美術館（Museum für Asiatische Kunst, Staatliche Museen zu Berlin - Preussischer Kulturbesitz）に多くの日本美術が所蔵されている。それらに比べると規模は小さいが、プラハ市内でも国立美術館のアジア部門が展示されているキンスキー宮殿（Palác Kinských）で歌川広重らの作品や陶磁器を観賞できる。葛飾北斎の『富嶽三十八景』や安藤広重の『東海道五十三次』も所蔵しているようであるが、展示はされていない。生徒達は、小学部の修学旅行でドレスデン美術館（Staatliche Kunstsammlungen Dresden）、中学部の修学旅行でペルガモン博物館（Pergamonmuseum）、ウォークラリーで国立美術館の中世部門アネシユカ修道院やチェコ音楽博物館などを見学している。家族旅行で美術館へ行ったという話もよく聞いた。美術館・博物館を訪れることは、彼等にとって日常的であると言える。しかし、日本をはじめとするアジアの美術に触れることは少ないようである。自分の国の芸術に触れる重要性と素晴らしさを知ってほしいという思いから企画した。

(1) 事前指導

キンスキー宮殿には古代エジプト、ギリシャ・ローマ美術、イラク・イラン、中国、朝鮮半島、日本の美術に

ついでに展示がある。日本美術では有田焼や九谷焼などの磁器、刀の鍔、漆器、象嵌細工なども展示されているが、社会科の事前学習では教科書で学習していることもあり、浮世絵に焦点を当てた。主な内容は、元禄文化と化政文化における浮世絵の変遷、代表的作家とその作品、浮世絵の海外流出と再評価である。

英語科では美術館の図録 *Art of Japan, Asian Art*, Michaela Pejčochová.ed (National Gallery in Prague, 2006) を利用して、観賞に必要な単語帳を作成した。生徒達は作品の材質に関する単語 (color woodcut, inlay, underglaze, overglaze など) を調べた。

(2) 国立美術館研修

生徒達はプラハに日本の美術作品が多く展示されていることに驚き、とりわけ、歌川広重、葛飾北斎、東洲斎写楽らの浮世絵や硯箱を熱心に眺めていた。遮光器土偶のレプリカや日本地図など社会科の教科書にも掲載されている作品を見つけて喜んでた。作品の隣に添えられた説明板を読み、自作の英単語帳と照らし合わせながら作品の材質などを確認していた。知識があればさらに楽しく美術品を鑑賞できるとして、興味深げに感想を述べ合う姿も見られた。事後の感想では「多くの浮世絵が海外に流出していることを残念に感じる」、「日本に作品が少ないのは残念だが、外国で大切に保存されているのならいいと思う」、「家族旅行でよく美術館や博物館へ行くが、今回の研修で、両親は作品の価値や良さを味わいながら見ているということに気付くことができた」などの意見があった。日本の美術作品を味わうということと、予備知識を持って鑑賞することの意義について改めて確認できた。



国立美術館見学の様子

その後、家族旅行で大英博物館に行った生徒達から、日本ギャラリーを鑑賞したという話を何度か聞くことができた。

4. チェコの学生からボランティア活動について学ぼう

～総合的な学習の時間と学級活動と英会話のクロスカリキュラム～

ギムナージウム・ストゥデウールキー (Gymnázium Stodůlky : Gymnázium mezinárodních a veřejných vztahů Praha / Grammar School of International and Public Relations Prague) から、ボランティア・サークルに所属する生徒がユニセフの活動について説明したいという話があった。それまでも日本人学校の生徒が、近隣の中学生に年中行事や衣食住などの日本文化について説明したり、実演したりすることはあったが、ボランティア活動について説明を受け質疑応答を行うという経験はなかった。そこで、中学部生徒を対象に「ユニセフの活動の一つであるピゴッタ・プロジェクトについて事前に学習し説明を聞くことで、交流や福祉に対する関心を深める」、「英語科や英会話で学習した表現を、実践に生かす」、「交流の場において、学習の意味をふまえ、適切な行動を行う」ことを目標に、英会話の講師の方々の協力を得て、英会話と総合的な学習の時間と特別活動の時間を活用して学習活動を計画した。

ピゴッタ・プロジェクト (The Pigotta Project) は、1988年、イタリアのミラノ近郊の小さな町で始まった。ボランティアスタッフが単に資金を調達するだけでなく、子どもたちに他の国々の恵まれない子どもたちについて考えさせるという概念がある。この活動では、ピゴッタと呼ばれる人形を作る。それは30-50cmの大きさで、人形には名前や国籍、髪や瞳の色が書かれたカードが付いている。ピゴッタは一体600 Kč (約3,000円) の寄付で養子に出され、その資金で命を守るための6種の子簿接種を一人の子どもに行うことができる。

(1) 事前指導

まず、学級活動の時間に中学部2年生3名が中心になってピゴッタ・プロジェクトについて学習し、それを1, 3年生に説明した。それを元に日本語で質問を考えた。その質問をもって英会話の授業に参加し、英語による表

現や発音について助言を得て、練習を行った。

(2) 交流

ギムナージウム・ストゥデウールキーからは14歳～17歳の生徒4名と教員1名が来校した。約1時間のプレゼンテーションでは、実物の医療物資、写真、ピゴッタ・プロジェクトの中心である手作りのぬいぐるみ等を見せてもらいながら話を聞いた。この中に子どもの栄養状態を確認するため手首に巻くリストバンドがあったが、そのあまりの細さに生徒達は衝撃を受けていた。

説明に使われた英単語の難易度は特に高いものではなく、予備知識を活用して実物を見ながら内容を理解するには十分であると思われた。その後の1時間は質疑応答の時間になり、あらかじめ準備していた質問（活動を始めた動機、人形の制作時間、他にどのようなボランティア活動をしているか等）やプレゼンテーションを受けて考えたことを尋ねたりした。一通りの質疑応答を終えて、互いの学校生活について尋ねあったりもした。

ギムナージウム・ストゥデウールキーの生徒達は、日本人学校の生徒にとって同年代とは思えないほど年上に見え、英語の会話力も高く、魅力的に映ったようで、たいへん興味をもって質問し耳を傾けていた。



ピゴッタ・プロジェクトの説明

5. さいごに

さまざまな教科の教職員と協力し合うことで、現地校の児童生徒と交流する機会をより有意義なものにすることができた。しかし、現地校と日本人学校とは年度始まりの時期が大きく異なるため、双方の希望時期を一致させることが困難であった。交流を継続して、互いの友情を深める為にも、一年間を見通し計画的に行うことが、常に課題であった。交流の際、中学部の生徒の交流は英語を用いて説明をする・聞く・質問する・答える・共に活動することが中心になる。英語科や英会話の担当者との連携は不可欠であった。

活動の内容や目標は発達段階に応じて変化するが、中学生を対象にした活動で、チェコで生活させていただきながら、チェコ語を活用できなかったことが心残りである。